

解説



科学的思考から技術的思考へ

Transition from Scientific Thinking to Technical Thinking

原 和彦*

Kazuhiko Hara

矢野 耕也** (聞き手)

Koya Yano

2020年から田口玄一に関わる過去のエピソードを含め、ベテランの会員に聞くというテーマでシリーズを続けている。今回は関西の総合家電メーカー出身で、初代副会長を務められ、また関西品質工学研究会で長年活躍をし続けている原和彦氏に話を聞くこととする。

1. はじめに

矢野(以下一) 田口玄一氏(以下田口と敬称略)は電電公社出身であるため、電話機の製造を通して電機メーカーとの関わりは古く、1950年代からさまざまな通信機メーカーとの付き合いがある。そこで総合電機メーカー出身である原氏に、田口との関わりを含めいろいろと聞きたい。そもそもはどのような研究や開発を行っていたのか。また品質工学との関わりはどのようなきっかけで始まったのか。

原 入社以来、松下電工(株)(現在はパナソニック(株))総合技術研究所で、はがき切手の自動発売機や電磁カウンタ、水晶発振器時計、有極電磁石リレーなどの技術開発や商品開発を行っていたが、科学的思考で日本初とか世界一とか性能重視の開発であったため、市場ではトラブルが多発していた。そこで、松下幸之助社主の最高顧問であった唐津一先生に信頼性試験のことを相談したところ、田口玄一先生(以下敬称略)を紹介されて、中部品質管理協会での指導を受けるようになったのは46歳(1980年)の時だった。

品質工学導入以前のモノづくり管理は、デミング賞受賞が最終目的で、大学の先生を呼んできて社長が中心になって行うTQC推進活動が企業の最大の

目的で、松下電工も事業部実施賞を受賞した。その時の開発システムは、開発段階でVOCから機能展開をして計測技術を確立し、目的機能を確立する「S-H(ソフト-ハード)変換」で最適な手段を選択する手法である。この手法の欠点はアイディアの創出には成功したが、品質工学のパラメータ設計の概念が欠如していたため、品質評価は従来の信頼性試験に頼っていたのである。

— 素朴な質問で、かつ立ち入った話で恐縮であるが、松下電工は松下電器産業の一部と思ってよいであろうか。松下〇〇という企業はあまりにも多いため、その関係性が部外者にわかりにくい部分であるのだが。また日本信頼性学会の資料には、田口の電電公社時代の上司であった唐津一、茅野健両氏が、1961年あたりから松下通信工業で信頼性工学を推進しているとあった。すでにこの時点で間接的に田口と縁があったことになる気もするが、前述した松下電工での課題は、信頼性向上や寿命試験などに関係していた内容だったのであろうか。

原 松下電工と松下電器産業の創業者は松下幸之助であり、戦後分社され、私が入社したのは松下電工だが、最近では両社が統一されてパナソニック(株)になった。茅野健、唐津一は松下通信工業へ入社して唐津は松下幸之助の最高顧問になり、茅野健はオーケンを設立して田口と一緒に仕事をするようになった。最近のパナソニックは家電から脱皮した方向に変身している。私が入社したのは昭和32年で松下

* 関西品質工学研究会

** 日本大学